

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：20102

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2022

課題番号：20K21932

研究課題名（和文）再誕生という観点から考察されたエゴの自己構成とその危機についての分析

研究課題名（英文）Exploring the crisis of ego's self-constitution through the lens of rebirth

研究代表者

本間 義啓（Homma, Yoshihiro）

釧路公立大学・経済学部・准教授

研究者番号：30881859

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、哲学と精神分析を横断的に解釈しながら、誕生経験を論究することである。アンリとロゴザンスキーの哲学を解釈し、誕生に関する特異な哲学的アプローチについての考察を行った。彼らにとって誕生は、かつてエゴが経験した過去の出来事ではない。現在においてエゴが自らを感じる経験のなかで遂行される出来事なのである。両者の（再）誕生概念を考察することによって、「生の現象学」と「残りものの現象学」という特異な現象学における時間性の問題を考察することができた。またラカンの誕生概念と対照させることにより、哲学者たちが論じた自我概念、時間経験の問題を、自己経験の危機という観点から解釈しようと試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の第一の意義は、先行研究がほとんどないロゴザンスキー哲学の研究の蓄積に寄与した点にある。ストラスブルで開かれたロゴザンスキー哲学に関する研究会で発表を行い、ロゴザンスキー哲学を理解するためのいくつかのアプローチを提示することができた。第二の意義は、アンリとロゴザンスキーの哲学を解釈することによって、誕生に関する哲学的議論に新たな展開の可能性を示すことができた点である。また、誕生に関する哲学の議論をラカンの精神分析と対照させることによって、誕生概念を多角的に分析するだけでなく、哲学と精神分析という二つの異なる言説の交差の可能性を提示することができた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to explore the experience of birth by analyzing the philosophies of Michel Henry, Jacob Rogozinski, and the psychoanalysis of Jacques Lacan. Rogozinski and Henry offer unique perspectives on the concept of (re-)birth. According to them, birth is not a past event that the self can only confront in a temporal gap; instead, it is relived each time the ego experiences itself in the present moment. Examining their concepts of birth helps us consider the issue of temporality in the phenomenology of Life and the phenomenology of remainder. By comparing the viewpoints of these two philosophers with Lacan's distinctive concept of (re-)birth, we can further delve into the temporal experience of the ego.

研究分野：哲学

キーワード：ミシェル・アンリ ジャコブ・ロゴザンスキー 誕生 エゴの時間経験 ジャック・ラカン

## 1. 研究開始当初の背景

哲学と精神分析という異なる二つの言説を突き合わせるだけでなく、自己経験、時間経験、そして誕生概念を深く論究してゆくために、アンリとロゴザンスキーの哲学を精神分析とともに読むこと。これが本研究を遂行する動機となっていた。この二人の哲学者は、フロイトやラカンの精神分析を批判することが多い。しかし、彼らの精神分析への批判の意義と射程を理解したうえで、そして、彼らの意図を裏切ることなく、精神分析と哲学の協働の可能性があるのでないかと考えたのだった。

アンリとロゴザンスキーは、ともに、自我と時間、そして誕生について特異なアプローチを提示した哲学者であった。それはラカンも同じである。彼らの思想をあわせて読解することによって、エゴの時間的自己構成の問題を多角的に考察することができると考え、研究を始めたのだった。

## 2. 研究の目的

まず、誕生概念に焦点をおいてアンリとロゴザンスキーを読解し、自己経験や時間概念に関する哲学的な考察の掘り下げを行うこと。そして、エゴの時間的自己経験、(再)誕生の経験を論じる哲学者たちの考察の射程内にある自己経験の危機の問題を取り出し、それを、精神分析の議論とおして、理解し直すこと。この2点が、本研究の主要な目的であった。

また、ロゴザンスキーについての研究を行うことにより、世界的に見ても未だ十分な研究が行われていない彼の哲学の独創性を提示し、彼の哲学の普及に努めることも、本研究の目的のひとつとなっていた。

## 3. 研究の方法

誕生というテーマのもと、アンリやロゴザンスキーのテキストを読解した。このテーマ設定により、エゴの自己経験や時間性に関する様々なアプローチやいくつかの問題構制を明らかにすることができた。また、時間や誕生に関する哲学者たちのアプローチの特異性を際立たせるためにも、非哲学的な、一般的な観点に配慮するかたちで、誕生がどのように考えられているのかを考察しようと試みた。さらに、誕生に関するラカンの考察をとりあげ、哲学と精神分析が、それぞれの仕方、どのようにして、どこまで誕生概念を掘り下げていったのかを考察したのだった。端的に言えば、誕生や時間的自己経験を考察するにあたって、分野横断的な手法を用いて研究を行った。

## 4. 研究成果

発表された研究成果は、主として、アンリとロゴザンスキーの哲学を論じたものばかりであった。精神分析の議論が考察されることはあっても、本研究では、哲学者たちのアプローチの特異性を際立たせる役割しか与えることができなかった。哲学とともに精神分析を読むためには、精神分析が主題化する自己経験の危機の問題を、より深く読解していく必要がある。そして、そのためには、自己の危機についての哲学的議論を丹念に解釈し直す必要がある。これが、本研究を遂行してゆくなかで発見された課題である。

本研究では、生ける現在において自らを感じる生を肯定するアンリやロゴザンスキーが(再)誕生を論じるとき、彼らが、エゴの危機の経験に関して、どのような問題を論じようとしていたのかを明らかにすることができた。アンリにおいては世界や時間や言語、ロゴザンスキーにおいては憎悪やファンタズムがエゴを疎外する要因、自己経験の危機となる。こうした危機を乗り越えるものとして、彼らは(再)誕生を論じたのであった。しかし、問われるべきは、(再)誕生の試みに内在する危機である。自らを新たに生き直すという経験そのもののうちに、どのような危機が内在しているのかを問う必要があるのだ。これが本研究以後の課題となる。エゴの自己構成の経験に内在する危機という研究テーマを取り出すことができたことこそが、本研究の大きな成果であった。

また、世界的に見て、研究の蓄積が十分ではないロゴザンスキー哲学の研究に関して、一定の貢献ができたことも本研究の成果の一つである。ストラスブルで研究発表をすることによって、フランスの研究者に本研究の成果の一部を提示することができた。

以下、主要な研究業績を挙げて、その概略を示す。

1)【論文】「誕生、時間、無意識 アンリの精神分析批判から解釈された「非脱自的時間」について」(日本ミシェル・アンリ哲学会編『ミシェル・アンリ研究』第11号)

主にアンリの『精神分析の系譜』を読解し、いかなる理由でアンリはフロイトを批判しなければならなかったのかを明らかにした。アンリのフロイト批判の意義と射程を考察し、エゴの時間的経験が議論の焦点になっていることを示した。

2)【論文】「ロゴザンスキと精神分析 抵抗と憎悪、身体経験のファンタスム」(釧路公立大学紀要『人文・自然科学研究』第34号)

ロゴザンスキーの『我と肉』を読解し、彼の精神分析批判の意図を解釈した。ラカンの鏡像段階に対する批判を吟味したのち、憎悪に関するフロイトの考察への批判を考察した。ロゴザンスキーの精神分析批判は、アンリのようにエゴの時間的経験だけを焦点としたものではない。ロゴザンスキーは、共同体的経験、「政治的身体」の問題を掘り下げてゆくために、精神分析との対決を必要としていたことが示されたのだった。

3)【論文】「誕生と自己経験：アンリにおける時間の問題」(日本ミシェル・アンリ哲学会編『ミシェル・アンリ研究』第13号掲載予定)

アンリの後期思想を解釈することによって、アンリの誕生概念の分析が試みられた。誕生に関する一般的な、非哲学的な解釈から出発し、現象学的なアプローチ、そしてラカンのアプローチを言及したのちに、アンリの誕生概念の特殊性が分析されたのだった。

4)【論文】「無意識の探究 真理と誕生の経験」(『ミシェル・アンリ読本』第三部第四章)

アンリが精神分析について論じたのは『精神分析の系譜』であり、そこでは、フロイトが批判的解釈の対象となっていた。アンリにおいてラカンへの言及は少ない。しかし、それを踏まえた上で、本稿では、あえてアンリをラカンと対照させるかたちで、アンリの思想の解釈を行ったのだった。ハイデガー解釈、そして誕生概念に関して、ラカンとアンリの類似性と距離を調査したうえで、アンリによる自己経験についての議論の特異性を明らかにしようとしたのだった。

5)【研究発表】「La voix et l'auto-constitution charnelle en tant que re-naissance : pour comprendre la temporalité du restant」

ロゴザンスキーの主著の一つである『我と肉』を重点的に解釈し、彼がどのように精神分析を批判しながら、誕生と時間経験についての議論を展開していったのかを明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 本間義啓	4. 巻 11
2. 論文標題 誕生、時間、無意識 アンリの精神分析批判から解釈された「非脱自的時間」について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本ミシェル・アンリ哲学会編『ミシェル・アンリ研究』	6. 最初と最後の頁 13, 26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20678/henrykenkyu.11.0_13	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 本間義啓	4. 巻 34
2. 論文標題 口ゴザンスキと精神分析 抵抗と憎悪、身体経験のファンタスム	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 釧路公立大学紀要『人文・自然科学研究』	6. 最初と最後の頁 1, 15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 本間義啓	4. 巻 13
2. 論文標題 誕生と自己経験：アンリにおける時間の問題	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本ミシェル・アンリ哲学会編『ミシェル・アンリ研究』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 本間義啓
2. 発表標題 非-脱自的時間と無意識：アンリにおける精神分析批判の射程
3. 学会等名 日本ミシェル・アンリ哲学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 本間義啓
2. 発表標題 自己経験としての誕生：アンリにおける時間の問題
3. 学会等名 仏哲学会2022年秋季大会プレシナポジウム、「ミシェル・アンリ再訪、生誕百年と『ミシェル・アンリ読本』公刊を機会に」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yoshihiro Homma
2. 発表標題 La voix et l'auto-constitution charnelle en tant que re-naissance : pour comprendre la temporalite du restant
3. 学会等名 Journee d'etudes : Le moi et la chair. Reponses et questions autour d'une oeuvre de Jacob Rogozinski (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 本間義啓
2. 発表標題 いかに「残りもの」に名を与えるか：残りものの現象学と政治的なもの
3. 学会等名 脱構築研究会主催、ジャコブ・ロゴザンスキー連続セミナー、『政治的身体とその 残りもの』合評会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 本間義啓（分担執筆）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 9
3. 書名 『ミシェル・アンリ読本』第三部第四章担当（「無意識の探究 真理と誕生の経験」）	

1. 著者名 本間義啓（分担執筆）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 2
3. 書名 『ミシェル・アンリ読本』第四部第七章第五節担当（「アンリとロゴザンスキー 不実な忠実さ」）	

1. 著者名 松葉祥一・本間義啓（共訳）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 月曜社	5. 総ページ数 24
3. 書名 『多様体』所収、ロゴザンスキー著「私に触れるな」の翻訳	

1. 著者名 Yoshihiro HOMMA	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Editions L'Harmattan	5. 総ページ数 311
3. 書名 L'Auto-determination par la loi（前年度までの研究）	

1. 著者名 ジャコブ・ロゴザンスキー（松葉祥一編訳・本間義啓訳）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 302
3. 書名 政治的身体とその 残りもの	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------